

フロイトの『ある幻影の未来』の一翻訳について

湯 田 豊

はじめに

精神分析の創始者がジグムント・フロイト(Sigmund Freud, 1856–1939)であることは、あまりにも有名である。彼はフライベルク（当時のオーストリア・ハンガリー、現在のチェコスロバキヤ）に生まれ、ウィーンにおいて成人した。フロイトはウィーンにおいて医学を学び、1881年に博士号を授与され、それから脳解剖学を専攻した。1885年に、彼はウィーン大学の神経病理学の講師に任命された。

フロイトの名著は『夢の解釈』(*Die Traumdeutung*, 1900)である。本書は、フロイトが精神分析と名づけたものの基礎を築いた。彼は自己の見解を、更に『日常生活の精神病理学』(*Zur Psychopathologie*, 1904), 『セックスの学説に関する3つの論文』(*Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, 1905), および『トーテムとタブー』(*Totem und Tabu*, 1913)において展開した。精神分析入門として現在においても凌駕されていないのは、彼の『精神分析入門のための講義』(*Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, 1917)である。

第2次世界大戦後、『快樂原理を超えて』(*Jenseits des Lustprinzipes*, 1920) および『自我とイド』(*Das Ich und das Es*, 1923)において彼は精神分析の理論的基礎を再検討し、それらを修正した。しかも彼は、70歳を過ぎてから宗教および文明について徹底的に反省をした。宗教および文明に関する彼の見解を代表するのが、それぞれ『ある幻影の未来』(*Die Zukunft einer Illusion*, 1927) および『文明とその不満』(*Das Unbehagen in der Kultur*, 1930)である。ドイツ語原典におけるフロイト全集には、12巻および18巻を含む2種類がある。そのなかで特に使用されるのは18巻本 *Gesammelte Werke. Chronologisch Geordnet*. London: Imago, 1940–52である。『ある幻影の未来』に関してわたくしが典拠にしたのは、*Gesammelte Werke*, XIV. Fischer Verlag, 1976., 5 Auflage,

pp. 325-80 である。そしてフロイト全集の英訳 *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. 24 vols. London: Hogarth Press, 1953-74 は世界的に有名である。

フロイトの『ある幻影の未来』に対する *Standard Edition* の英訳は、*The Future of an Illusion* (Newly Translated from the German and Edited by James Strachey) である。さて、我が国においてもっとも親しまれているフロイト全集は、恐らく京都の人文書院から刊行された『フロイト全集』であろう。この全集において *Die Zukunft einer Illusion* は、浜川祥枝女史によって「ある幻想の未来」(1969年初版, 1983年重版)と邦訳されている。そして、「ある幻想の未来」という訳語は、我が国において定着しつつある。以下において浜川女史の訳を取り上げて、わたくしは「ある幻想の未来」の翻訳について若干の所見を述べたい。1985年の5月に、わたくしは『宗教とは何か——新しい人間性を求めて——』(東京 北樹出版)という小冊子を出版した⁽¹⁾。本書の第VII部 フロイトと宗教 において、『ある幻影の未来』から、わたくしはかなりの部分を引用して翻訳した。この機会に、*Die Zukunft einer Illusion* の一翻訳について、わたくしは少しばかり論じたい。

I

Die Zukunft einer Illusion の翻訳について論じる前に、わたくしは「ある幻想の未来」という本書のタイトルが適切であるか否かを検討しなければならない。その際、*Standard Edition* を引き合いに出すのは無益である。なぜなら、英訳においては *Illusion* はそのまま *Illusion* と訳されているからである。*Illusion* という語に関してわたくしが最初に連想するのは、実現されない希望である。そして、この希望は人をだます性質のものである。現実に関する理想化された観念が、すなわち *Illusion* である。しかし、その観念は決して現実にマッチしない。このようなニュアンスを含蓄する語が *Illusion* である。それは、根拠のない期待を言外に意味する。この語を、わたくしは“幻影”と翻訳する。これに対して *Phantasie* (*Fantasia*) という語は、わたくしに想像あるいは空想を連想させる。*Phantasie* に関する限り、ある事柄が現実にマッチしているか否かは問

題ではない。ここにおいて支配的なのは生き生きとした想像である。Phantasie を、わたくしは“幻想”と訳したい。“幻影”と“幻想”は同一の事物を表現するというふうに、わたくしは考えない。“幻想”は人間の自由な想像力に基づいているというのが、わたくしの解釈である。しかし“幻影”において作用するのは、人をだます希望、自己欺瞞である。Illusion は、決して単なる夢想を意味しない。しかるに Phantasie は、単なる空想、単なる夢想である。現実に関する誤った知覚が、“幻影”の本質である。しかし“幻想”においては、ある事柄が空想的、非現実的、あるいは架空的であることが示されれば十分である。“幻影”と“幻想”を、わたくしはこのように区別する。

わたくし自身はこのように Illusion を解釈するけれども、フロイト自身は *Die Zukunft einer Illusion* において Illusion という語をどのように使用しているのであろうか？ この点に関して、わたくしはささやかな検討をしよう。

フロイトによれば、宗教的な観念が“幻影”である（『ある幻影の未来』 p. 335）。彼の場合、宗教的観念および宗教教義は同義語である。彼は本書 VI において次のように言う——*Diese, die sich als Lehrsätze ausgeben, sind nicht Niederschläge der Erfahrung oder Endresultate des Denkens, es sind Illusionen, Erfüllungen der ältesten, stärksten, dringendsten Wünsche der Menschheit; das Geheimnis ihrer Stärke ist die Stärke dieser Wünsche.* (p. 352)

浜井訳——みずから教義と名乗っているこれらの観念は、経験の集積や思考の最終結果ではなく、幻想であり、人類が抱いているもっとも古く、もっとも強く、もっとも差し迫った願望の実現なのである。宗教的観念の強さの秘密は、これらの願望の強さにある。（『ある幻想の未来』。 (p. 383)）

湯田訳——教義と称せられるこれらの宗教的観念は、経験の沈澱あるいは思考の最終結果ではない。それらは幻影、すなわち人類のもっとも古い、もっとも強い、そしてもっとも切迫した願望の成就である。それらの強さの秘密は、これらの願望の強さである。

Illusion に関して、フロイトはそれを誤謬 (Irrtum) から区別する。それゆえに、彼は「幻影は誤謬とは同一ではない。それはまた、かならずしも誤謬であるとは限らない」(p. 353) と言う。彼によれば、害虫が汚物から発生するというアリストテレスの学説は誤謬である。しかしインドへの新しい海路を発見したというのは、コロンブスの側の一つの“幻影”であった。なぜなら、「この誤謬における彼の願望の部分は非常に明瞭である」(同上) からである。結局、「それが人間の願望から派生されるというのが、幻影にとって特徴的である」(同上) ということになる⁽²⁾。フロイトは、幻影について次のように定義している——Wir heißen also einen Glauben eine Illusion, wenn sich in seiner Motivierung die Wunscherfüllung vordrängt, und sehen dabei von seinem Verhältnis zur Wirklichkeit ab, ebenso wie die Illusion selbst auf ihre Beglaubigungen verzichtet.

浜井訳——つまりわれわれは、願望実現ということが主要動機になって生まれた信念を幻想と呼ぶのであって、現実との関係がどうなっているかは——幻想自体も自分が証明されることを要求していないと同じく——あえて問題にはしないのである。(p. 384)

湯田訳——それゆえに願望成就がその動機づけにおいて前面に押し出される時、われわれはある信仰をある幻影と呼び、幻影自身がその信すべきことを断念すると同様、その際われわれは現実に対するそれ (ある信仰) の関係を無視する。

フロイトによれば、宗教教義はすべて“幻影”である。宗教教義を幻影として認識することを以て、フロイトは満足する。『ある幻影の未来』においてフロイトがある幻影とみなしたのは、まさに宗教あるいは宗教教義であった。世界創造者および慈愛に満ちた摂理としての神、倫理的な世界秩序、および来世が存在したとしたら、どんなにかすばらしいことであろう (p. 356 参照)。このようにフロイトは皮肉る。神、倫理的な世界秩序、および来世——これらは、まさに“幻影”である。これらは人間がその豊かな想像力を働かせて創造する“幻想”ではなく、人間が心からその存在を願望する希望的観測である。それらは、存在することが望ましいものである。

それらの存在を人々は希望し、期待する。それらは幻想というよりも、むしろ“幻影”である！ この理由から、*Die Zukunft einer Illusion* を、わたくしはある幻影の未来と翻訳する。

II

「ある幻影の未来」における三大テーマは、文明、宗教、および科学である。文明に関して、フロイトは『文明とその不満』において独特の理論を展開する。しかし『ある幻影の未来』において、彼は彼自身の文明論をスケッチする。しかし、わたくしはここで無造作に“文明”と言ったけれども、このような言い方には問題がある。『ある幻影の未来』において、フロイトは「そして、わたくしは **Kultur** および **Zivilisation** を切り離すことを軽蔑する」(p. 326) と述べている。そして彼は **Zivilisation** という語を避け、**Kultur** という語を一貫して使用している。**Kultur** に対して、われわれは出来るだけ同一の訳語を与えるべきである。もちろん文脈の関係上、**Kultur** はある時には文化、ある時には文明と訳されるであろう。しかし、出来るだけ統一的な訳語を選ぶことが望ましい。本書の英訳 (*Standard Edition*) においては、**Kultur** は原則として“文明” (*Civilization*) と訳されている⁽³⁾。しかるに浜井女史は、**Kultur** を一貫して“文化”と訳している。一般的には **Kultur** に対する訳語は、もちろん文化である。しかしフロイト自身は、**Kultur** をどのように外国語に翻訳するのが望ましいと考えていたのであろうか？ この問題に対して一つのヒントを与えるのは、『文明とその不満』 (*Das Unbehagen in der Kultur*) の題名の英訳である。本書の英訳者である Mrs. Riviere に宛てた手紙のなかで、本書のタイトルの英訳名としてフロイトは *Man's Discomfort in Civilization* を示唆した。しかし彼女は、フロイトのこの示唆を受け入れなかった。しかし、ここで問題になるのは、フロイト自身が **Kultur** に対する訳語として *Civilization* を選んだことである。確かに、**Kultur** と *Civilization* を厳密に区別することは困難である。フロイトは言語的な定義を試みる代わりに、**Kultur** の実質的な定義を試みた。わたくし自身は、『ある幻影の未来』においては原則として **Kultur** を“文明”と翻訳するのが望ましいと考える。

フロイトによれば、**Kultur** の主要課題、その存在理由は、人間を自然から守ることである。フロイトの **Kultur** 理論の核心は、まさにこのことに尽きる。フロイトの **Kultur** 理論のなかで特に注目に値するのは、**ein Feind der Kultur** という発想である。…**jeder Einzelne virtuell ein Feind der Kultur** (pp. 326-27) という表現を、浜井女史は「すべての人間には、本来ならば…文化にたいする敵意が潜んでいる…」(p. 363) と訳している。当該箇所を、わたくしは「すべての個人は潜在的に文明の敵である」と翻訳する。**Ein Feind der Kultur** を浜井女史は「文化にたいする敵意」と訳している。しかし **Feind** は敵を意味する語である。敵意を意味するドイツ語は、**Feind** ではなく **Feindschaft** である。敵意を意味する語として、例えば、フロイトは **Kulturfeindschaft** (p. 333) という表現を使用している。「すべての個人は、潜在的に文明の敵である」というフロイトの命題は、極めてショッキングである。ここにおける **Kultur** は、どうしても“文明”でなければならない。

文明に関して、フロイトは次のように言う——「事實はむしろ、あらゆる文化は強制と欲動断念とを基礎とせざるをえないように思われる」(浜井訳, p. 364)。 *Standard Edition* においては、この箇所は **It seems rather that every civilization must be built up on coercion and renunciation of instinct** と訳されている。わたくしには、浜井訳よりもこの英訳の方が適切であるように思われる。“欲動”という訳語はグロテスクである⁽⁴⁾。“欲動断念”という無器用な造語よりも、むしろ **renunciation of instinct** の方が優れているように思われる。問題の箇所のテキストは次の通りである——**Es scheint vielmehr, daß sich jede Kultur auf Zwang und Triebverzicht aufbauen muß** (p. 328)。 **Trieb** を **Instinkt** と同一視することが可能かどうかは、心理学的には微妙である。しかし **Trieb** を“本能”と訳すことに、わたくしはそれほど抵抗を感じない。しかし、それを“欲動”と訳すことに、わたくしは抵抗を感じる。 **Triebverzicht** を、わたくしは仮に“衝動放棄”と翻訳したい。それゆえに、わたくしは該当箇所を次のように翻訳する——「むしろ、すべての文明は、強制および衝動放棄の上に築かれねばならないように思われる」と。フロイトがここで“強制”と称するのは、もちろん“労働” (**Arbeit**) のことである。人は労働を強制され、しかも衝動放棄を強いられるというのが、フロイトの文明

論のハートである。

浜井女史は、*Triebwünsche* を“欲動願望”と訳している (p. 331, 浜井訳 366 ページ)。そして“欲動願望”とは、神経症患者の場合、近親相姦 (Inzest), 人食い (Kannibalismus), および殺人欲 (Mordlust) である。Solche Triebwünsche sind die des Inzests, des Kannibalismus und der Mordlust (p. 331) というテキストを、浜井女史は「その欲動願望とは、近親相姦・食人・殺人の三つである」(366 ページ) と訳している。しかしこの文脈においては、*Triebwünsche* は *Standard Edition* における訳のように the instinctual wishes とした方がよいように思われる。Instinkt および Trieb を鋭く区別することは、フロイトにおいてはそれほど意味があるようには思われない。当該の箇所を、わたくしは次のように翻訳する——「そのような衝動的な願望には、近親相姦、人食い、および殺人欲のそれらが含まれる」と。ちなみに、Mordlust は“殺人”ではなく、人を殺したいという欲望を意味する。人は、この語を“殺意”と訳してもよいであろう。

さて、浜井女史は“欲動”が満足させられない事態を“拒否” (Versagung), この拒否が制度化された状態を“禁令” (Verbot), この“禁止”から生まれる状態を“不自由” (Entbehrung) と訳している (同上)。Verbot を、彼女は“禁令”および“禁止”と訳している。しかし、同一の語を出来るだけ同一の訳語を以て訳すのが翻訳の常識である。しかるに女史は、近接している Verbot を上記のように別々に訳している。Entbehrung を“不自由”と訳すのは正しい。Entbehrung は、必要なものが欠けている状態を示す語である。わたくし自身は、この語を“欠乏”と訳したい。問題は、Verbot でもなければ Entbehrung でもない。わたくしが問題にしたいのは、Versagung である。浜井女史は、この語を“拒否”と訳している。もちろん、この訳は正しい。しかし精神分析においては、Versagung は願望、あるいは衝動などの実現され得ない状態を意味する。それゆえに、*Standard Edition* において Versagung が frustration と訳されているのは適切である。Versagung は欲求不満、挫折感を意味する。

フロイトが芸術を代用満足とみなしたことは広く知られている通りである。Die Kunst bietet, ... Ersatzbefriedigungen für die ältesten, immer noch am tiefsten empfundenen Kulturverzicht... (p. 335) と

いう箇所は、フロイトの文明論を知る上で決定的に重要である。この箇所を、浜井女史は「…芸術は、文化の要求に応じてわれわれが行なっているものの、魂のもっとも深い部分ではいまなお未練を残している最古の願望断念にたいする代用満足であり…」(369 ページ)と訳している。ここの箇所を、わたくし自身は次のように翻訳する——「芸術は…もっとも古い、今なおもっとも深く感じられている、文明における(衝動)放棄に対する代用満足である」と。浜井訳においては、*Kulturverzicht* は“願望断念”となっている。しかしフロイトがこの語によって意味しているのは *Triebverzicht* である。なぜ浜井女史は、ここで“願望断念”と言う代わりに“欲動断念”と訳さなかったのであろうか？ しかし、それだけではない。「文化の要求に応じてわれわれが行なっているものの、魂のもっとも深い部分ではいまなお未練を残している」という訳語に対応するドイツ語のオリジナルは、残念なことどころにもない。Die Kunst bietet, … *Ersatzbefriedigungen für die ältesten, immer noch am tiefsten empfundenen Kulturverzicht* … という、簡明で力強く、しかも明晰なフロイトの文章は、「ある幻想の未来」において意味不明の、難解な日本語になってしまった…

III

『ある幻影の未来』は、全部で I-X のセクションから構成されている。I-II において、われわれは“文明”(Kultur)あるいは“衝動”(Trieb)という語に出会った。III-IV において、われわれは文明および宗教の起源に関するフロイトの学説を見いだす。文明の第一の使命について、フロイトは次のように語っている——「自然がわれわれを脅かす、まさにこれらの危険ゆえに、確かにわれわれは集まって(=力を合わせて)文明を創った。そして、それはまたとりわけ、われわれの共同生活を可能にするはずであった。確かに、われわれを自然から守ることが文明の主要課題、その本来的な存在理由である」(p. 336)。たった今わたくしが示したのは、わたくし自身の訳である。ここの箇所は、浜井女史によって次のように訳されている——「じじつ、われわれが結束して文化を作ったのも、このような自然の側からの脅威に直面したからこそであって、文化の使命のなか

には、われわれの共同生活の可能化ということも含まれている。それどころか、文化の第一の使命、文化の存在理由の根本は、われわれを自然から守ることなのだ」(370 ページ)。浜井女史の訳は **readable** であるかもしれない。しかしフロイトの肉声は、女史の訳を通じてわれわれに伝わらない。フロイトの息吹きを感じさせるような訳を、読者は求めるのだ。読みやすいということが翻訳の基準ではない。翻訳においてもっとも重要なことは、著者の息吹きを感じさせるような忠実で正確な訳語である。

さて、文明の主要課題が人類を守ることであるとしても、現実の問題として、文明に果たしてわれわれを自然の脅威から守るだけの力があるかどうかは疑問である。この点に関して、フロイトは厭世的である。フロイトの厭世的な考え方を、浜井訳および湯田訳によって示そう――

浜井訳——われわれがそういう期待を抱くにしては、人間のあらゆる規制力を嘲笑するような現象があまりにも多い。震動し、引き裂き、すべての人間の手になるものを埋没してしまう大地、いったん氾濫すれば万物を押し流し溺れさせてしまう水、他の生物からの攻撃によって起こることがつい最近ようやく分かってきたかすかすの病気、そして最後に、死という、これまで、いかなる薬によっても対抗することができず、おそらく将来とても対抗することはできないと思われる、悲惨な、謎めいた現象がある。(pp. 336-37; 370-71 ページ)

湯田訳——あらゆる人間的な強制を嘲笑するように思われる自然力が存在する――震動し、ひき裂き、一切の人間生活および人間の作ったものを埋めてしまう大地、騒然として一切を氾濫させて溺れさせる水、(一切を)吹き払う嵐が存在する。近頃ようやく、われわれが他の微生物による攻撃として認めるようになった病気が存在する。そして最後に、それに対して今まで如何なる薬も見いだされず、恐らく(これから)見いだされないであろう死という悲痛な謎がある。

浜井女史は、「われわれがそういう期待を抱くにしては」と訳している。

しかし、この文章に対応するドイツ語のテキストは存在しない。女史は、「…人間のあらゆる規制力を嘲笑するような現象があまりにも多い」と訳している。しかしフロイトは、「…自然力 (Elemente) が存在する」としか言っていない。更に浜井女史は、“水”の次に“病気”について訳している。しかし、その中間に **der Strum, der es wegbläst** という文章が入らねばならない。浜井訳においては、この箇所に対する訳が欠落している！最後に、浜井女史は病気に関して「…死という、これまで、いかなる薬によっても対抗することができず、おそらく将来とともに対抗することはできないと思われる、悲惨な、謎めいた現象がある」と訳している。しかし、「いかなる薬によっても対抗することができず…」という訳文のオリジナルは、**kein Kräutlein gefunden wurde** である。フロイトは、無造作に今まで死に対して如何なる薬も発見されなかったと言っているだけである。しかも女史は、「死という、…悲惨な、謎めいた現象」と訳しているが、彼女が“悲惨な”と訳したドイツ語の **schmerzlich** は“悲痛な”というほどの意味である。この語は **Schmerz** から派生した語である。“悲惨な”に対応するドイツ語は **elend** である。苦痛 (**Schmerz**) および悲惨 (**Elend**) は鋭く区別されるべきである。一流のスタイリストであったフロイトは豊かな言語感覚に恵まれ、言語のニュアンスに極めて敏感であった。ゲーテ、ニーチェ、あるいはフロイトのように言語の陰影を重んじる思想家の文章を他の言語に翻訳する人は、著者の肉声を忠実に読者に伝えなければならない。そして更に“謎めいた現象”ではなく、“死という悲痛な謎”がフロイトの言わんとしたことである。**Readable** であるということが翻訳の基準ではなく、忠実な訳がその基準であるべきである——これが、わたくし自身の意見である。

自然から人間を守るのが文明の課題である。そのための手段としてフロイトがわれわれに示したのは、自然を **vermenschlichen** すること (p. 338) である。浜井女史は、この語を“人格化して考えること” (371 ページ) と訳した。フロイトは別の箇所で **Vermenschlichung der Natur** (p. 343) という表現を用いている。浜井女史は、ここの箇所を「自然が人格化されるのは」 (376 ページ) と訳している。しかるに女史は、**auch wenn er die Naturkräfte personifiziert** (p. 344) を「自然力を人格化するにあたって」 (同上) と訳している。フロイト自身、**vermenschli-**

chung および **personifizieren** を同義語的に使用したと考えることは、もちろん、可能である。しかし **vermenschlichen** は、自然を人間の姿において表わすことを意味する。私見によれば、それは“人格化する”というよりも、むしろ“擬人化する”こと、“人間化する”⁽⁵⁾ことである。

自然を人間化することによって、人間は恐るべき自然を人間にとって近づきやすいものとみなし、逆に危険からわれわれを守ってくれるものにそれを変えようとした。このようにして自然あるいは自然の諸力は神々になり、それらはやがてわれわれの単一の父になった。いずれ自然を人間化する試みは廃れるが、人間が頼りのない存在であるという事実は、そのまま残る。このようにフロイトは考えた。あの有名な“神々の三つの課題”について、フロイトは次のように言う――

Die Götter behalten ihre dreifache Aufgabe, die Schrecken der Natur zu bannen, mit der Grausamkeit des Schicksals, besonders wie es sich im Tode zeigt, zu versöhnen und für die Leiden und Entbehrungen zu entschädigen, die dem Menschen durch das kulturelle Zusammenleben auferlegt werden. (p. 339)

浜井訳——依然として神々は、自然の暴威を押えること、ことに死という事実にあらわれる運命の残忍さとわれわれを和解させること、および、文化のもとでの共同生活がわれわれに押しつける苦痛と不自由とを償うことという、三つの使命をおびつづける。
372-73 ページ)

湯田訳——神々は、彼らの三重の課題を保持する——彼らは自然の恐怖を追放しなければならない。彼らは、特に死において示されるような運命の残酷さと（人間を）和解させなければならない。彼らは、文明における共同生活を通じて人間に課せられる苦悩および欠乏の償いをしなければならない。

自然の恐怖と死、および共同生活における苦悩と欠乏から人間を守るのが神々の三重の課題であり、やがて、この課題は宗教のそれになるはずであった。しかし宗教がわれわれを守ることが認められるや否や、現世の生

活はある目的を達成するための手段になってしまう。“来世”あるいは“あの世の生”が、今や最高の価値になる。フロイトによれば、宗教的観念はみずからを自然の圧倒的な優勢から守るという必要から生じた (p. 343 参照)。そして神々は、今や唯一の神、唯一の父へと高められていく。宗教的観念がわれわれを二つの面から守るという考え方に対して、フロイトは次のように述べている——

浜井訳——このようにして、われわれの寄辺ない状態を耐えるものにしたという要求を母胎とし、自分自身と人類の幼児時代の寄辺ない状態への追憶を素材として作られた、一群の観念が生まれる。これらの観念が、自然および運命の脅威と、人間社会自体の側からの侵害という二つのものにたいしてわれわれを守ってくれるものであることははっきりと読みとれる。(373 ページ)

湯田訳——そのようにして、豊富なもろもろの観念が創られる。それらは人間の頼りのなさを耐えられるようにしようという必要から生まれ、自己自身の幼年時代および人類の幼年時代の頼りのなさの記憶の材料から築かれている。(これらの観念の) この所有が人間を二つの方向、すなわち自然と運命の危険および人間社会自身に由来する傷害に対して彼を守るということは、明瞭に認められ得る。

文明の第一の使命が人間を自然の脅威から守ることであるとすれば、この役割を担うのは父としての神である。しかし人間は父である神に対してアンビヴァレンツ的である。フロイト自身の言葉によれば、「しかし (子供の) 父に対する関係は、独特のアンビヴァレンツに取りつかれている」(p. 346, 湯田訳) のである。父に対する関係は、フロイトの宗教観を理解する上で特に重要である。たった今わたくしが引用したフロイトの文章に、次の文句が続く——「恐らく母に対する以前の関係から、父はみずから一つの危険であった」(同上, 湯田訳) と。そしてフロイトはこの直後に、こう言っている——「それゆえに、人は父を慕い父を讃美するのに劣らず、彼を恐れる」(同上, 湯田訳) と。わたくしが引用したこれらの文章は極

めて簡明であり、しかも最高に明晰である。しかるにフロイトの文章は、浜井女史によって次のように訳されている——「ところが、父親にたいする関係は、独特のアンビヴァレンツを免れることができない。幼児にとっては、そしてそれはたぶん、幼児がまえに母親にたいして抱いていた感情が原因でそうなのであろうが——父親自身が一つの危険を意味していた。したがって幼児は、父親を憧れ讃嘆するのに劣らず、父親を恐れてもいる」(378 ページ) と。翻訳においてもっとも重要なのは、訳者の声ではなく著者の肉声を言語の障壁を越えて直接読者に伝えることである。翻訳者は、原典を尊重し、原典のなかに潜んでいる著者の体験に触れねばならない。そうでなければ、ある一つの言語を他の言語に翻訳することは、どんな意味を有するのであろうか？

IV

『ある幻影の未来』のなかでもっとも重要なセクションは、恐らくVおよびVIであろう。これらのセクションにおいて、フロイトは独特の宗教批判を試みている。翻訳上の観点から、わたくしはこれらのなかから極めて僅かの箇所を取り上げ、それらを簡単に検討しよう。

セクションVの最初のパラグラフにおいて、フロイトは宗教の定義をしている。浜井女史の訳によれば、それは次の通りである——

宗教的観念とは、教義——つまり外的（ないしは内的）現実の事実および諸関係についての発言——であって、その内容はわれわれが自分で発見したのではなく、しかもわれわれは、それを信じることを要求されているのである。(378 ページ)

宗教に関するフロイトの定義は独創的であり、われわれの注目に値する。しかし浜井訳は忠実な訳ではない。彼女が「その内容は」と訳した文句に対応するオリジナル・テキストは存在しない。わたくし自身は、当該箇所を次のように翻訳する——「宗教は、外的（あるいは内的な）現実の諸事実および諸関係についての教義、主張から成り立つ。そして、それらは人がみずから発見しなかった何かあることを知らせ、人がそれらを信用する

ことを要求する」と。宗教が教義から成り立つと定義した後で、フロイトはなぜわれわれが教義を信じなければならないかと問う。そして、ここで注目には値するのは、彼が彼自身のテーマを仮想上の論敵との対話を通じて生き生きとわれわれに示している事実である。このような形の問題提起において、フロイトは実にすばらしい。そして宗教教義に関して、フロイトは仮想上の論敵の三つの“証明”をわれわれに提示し、最後に彼はこれらの証明を各個に論破する。論敵の三つの証明を、フロイトは迫真の筆致を以てスケッチする。しかるに浜井訳においては、フロイトの仮想上の論敵との対話の精神が欠落している。浜井訳と湯田訳を、わたくしは以下において示そう――

浜井訳——宗教上の教義をこの標準で測ってみよう。われわれがこの種の教義をなぜ信じなければならないか、その根拠を尋ねた場合、三種類の答がはね返ってくるが、それらは三つとも、驚くほど不合理な答である。第一の答は、われわれが先祖代々信じてきたことだから信ずるに値するというのであり、第二の答は、そのわれわれの遠い祖先から伝わっている証拠が現に存在するというのであり、第三の答は、そういう問を投げかけること自身そもそも許されないというのである。(379-80 ページ)

湯田訳——われわれは宗教教義を同一の基準を以て測ろうと試みようではないか？ 信じられねばならないという宗教教義の要求が何に基づいているのかと、もしもわれわれが尋ねるならば、互いに著しくひどく調和しない三つの答えを、われわれは受け取る。第一に、それらは信仰に値する。われわれの祖先がすでにそれらを信じていたからである。第二に、まさにこの太古からわれわれに伝えられて来た証拠を、われわれは所有している（からである）。そして第三に、これらが信ずべきものであることに対して疑問を投げ掛けることは全く禁じられている（からである）。

フロイトが仮想上の論敵の主張を対話の形を通じてわれわれに提示する

ということが、是非翻訳においても感じられねばならない。そうでなければ、フロイトの反論そのものも迫力を失ってしまう。しかし、ここでは“三つの答え”に対するフロイト自身の反論を省略して、宗教教義を弁護する“二つの試み”について、わたくしは翻訳上の問題を検討しよう。フロイトによれば、第一の試みは *Credo quia absurdum* である。そして第二の試みは“かのように” (Als ob) の哲学の試みである。

第一の試みについて、フロイトは *Der erstere ist das Credo quia absurdum des Kirchenvaters* (p. 350) と言っている。このテキストに対する浜井訳は、次の通りである——「最初のは、『理に合わざるがゆえにわれはそれを信ず』 (*Credo quia absurdum*) というアウグスティヌスの方法である」(381 ページ)。そして浜井訳においては、*Credo quia absurdum* は一貫して「理に合わざるがゆえにわれはそれを信ず」と訳されている。ここで問題になるのは、*Credo quia absurdum* という言葉を口にしたのがアウグスティヌスであるという浜井女史の訳し方である。一般に“不条理なるがゆえに、わたくしは信じる”と告白したのは、アウグスティヌスではなくテルトリアヌスであると言われている。それなのに、浜井訳においてはなぜかアウグスティヌスに *Credo quia absurdum* という文句が帰せられている。しかしフロイト自身は、教父にこの文句が帰せられることを示唆するだけである。わたくし自身は当該箇所を、「最初の試みは、教父の“不条理なるがゆえに、わたくしは信じる”ことである」と翻訳してもよいと思う。

さて、フロイトが第二の試みとして挙げているのは、ドイツの哲学者ハンス・ファイヒンガーの“かのように”の哲学である。これについて、フロイトは次のように述べている——

浜井訳——その試みによると、「われわれの思考活動の領域には、根拠のないものであることどころか、理に合わないものであることさえわれわれが十分に承知しているような仮説がたくさんある。いわゆるフィクションがそれであるが、われわれはさまざまな実際的な考慮から、あたかもそれらのフィクションを信じている《かのように》振舞わねばならない。このことは宗教上の教理にもあてはまる。なぜなら、宗教上の教理は、人類社会を維

持してゆく上でほかのものとは較べものにならないほどの重要性を持っているのだから」というのである。(382 ページ)

たった今わたくしが引用した翻訳によれば、フロイトはかなりむずかしい表現をしているように思われる。しかし、彼の陳述は簡明である。浜井訳に対して、わたくしは自己自身の翻訳を対比させよう——

湯田訳——われわれの思考活動においてそれらの根拠のなさ、確かにそれらの不条理をわれわれが十分に見てとるたくさんの想定が存在することを、その試みは詳細に説明する。それらは“フィクション”(虚構)と呼ばれる。しかし種々の実際的な動機から、これらのフィクションをわれわれが信じる“かのように”，われわれは振舞わねばならないであろう。人間社会を維持するためにそれらは比類のないほど重要であるゆえ、これは宗教教義にあてはまる、とこのように論じられる。

さて、*Credo quia absurdum* にもう一度戻って、わたくしはフロイトの文章を検討しよう。フロイトが試みているのは、非理性の批判である。『ある幻影の未来』のなかで特にわたくしの興味をそそるのは、彼の次の文章である。湯田訳および浜井訳を対比させ、フロイトの非理性批判の一端を、以下においてわたくしは読者に示そう——

フロイト——Der erstere ist das *Credo quia absurdum* des Kirchenvaters. Das will besagen, die religiösen Lehren sind den Ansprüchen der Vernunft entzogen, sie stehen über der Vernunft. Man muß ihre Wahrheit innerlich verspüren, braucht sie nicht zu begreifen. Allein dieses *Credo* ist nur als Selbstbekenntnis interessant, als Machtspruch ist es ohne Verbindlichkeit. Soll ich verpflichtet werden, jede Absurdität zu glauben?

Und wenn nicht, warum gerade diese? Es gibt keine Instanz über der Vernunft. (p, 350)

湯田訳——最初の試みは、教父の *Credo quia absurdum* である。宗教教義が理性の要求から遠ざけられ、それらの教義が理性の上に立っていることを、それは言外に意味するであろう。人は教義の真理を内面的に感知しなければならず、それらを概念把握するには及ばない。しかし、この *Credo* (我れ信ず) は自己告白として興味があるだけであり、絶対命令としては拘束力を有しない。すべての不条理を信じる義務を、わたくしは負わされるべきであろうか？

そして、もしもそうでなければ、なぜ、まさにこれを信じる義務があるのか？ 理性を超えた法廷は存在しない。

浜井訳——最初のものは、「理に合わざるがゆえにわれはそれを信ず」(*Credo quia absurdum*) というアウグスティヌスの方法である。その言わんとするところは、「宗教上の教理は理性の要求の手の届かないところにあり、理性を超越している。われわれはそれが真理であることを心で感ずべきであって、理解する必要はない」というのである。けれども、「われはそれを信ず」という言葉が意味を持つのは、それが自己告白である場合だけで、他人への要求としてはまったく力を持たない。理に合わないものはすべて信ぜよとでもいうのだろうか。そうではないとすれば、なぜ選りに選ってこの宗教上の教理を信じなければならないのだろうか？ 理性こそは最高の法廷である。(381 ページ)

セクションVにおいてわたくしが感銘を受けるのは、「理性を超えた法廷は存在しない」(*Es gibt keine Instanz über der Vernunft*) という文句である。しかしセクションVIにおけるもっとも重要な箇所は、最後から二番目の段落 (p. 355) である。この箇所は、同時に『ある幻影の未来』のなかでもっとも有名である。以下において、わたくしはフロイトの原文およびわたくし自身のの翻訳を挙げよう——

Freud——…Die Unwissenheit ist die Unwissenheit; kein Recht

etwas zu glauben, leitet sich aus ihr ab. Kein vernünftiger Mensch wird sich in anderen Dingen so leichtsinnig benehmen und sich mit so armseligen Begründungen seiner Urteile, seiner Parteinahme, zufrieden geben, nur in den höchsten und heiligsten Dingen gestattet er sich das. In Wirklichkeit sind es nur Bemühungen, um sich oder anderen vorzuspiegeln, man halte noch an der Religion fest, während man sich längst von ihr abgelöst hat. Wenn es sich um Fragen der Religion handelt, machen sich die Menschen aller möglichen Unaufrichtigkeiten und intellektuellen Unarten schuldig. Philosophen überdehnen die Bedeutung von Worten, bis diese kaum etwas von ihrem ursprünglichen Sinn übrig behalten, sie heißen irgendeine verschwommene Abstruktion, die sie sich geschaffen haben „Gott“, und sind nun auch Deisten, Gottesgläubige, vor aller Welt, können sich selbst rühmen, einen höheren, reineren Gottesbegriff erkannt zu haben, obwohl ihr Gott nur mehr ein wesenloser Schatten ist und nicht mehr die machtvolle Persönlichkeit der religiösen Lehre. Kritiker beharren darauf, einen Menschen, der sich zum Gefühl der menschlichen Kleinheit und Ohnmacht vor dem Ganzen der Welt bekannt, für „tief religiös“ zu erklären, obwohl nicht dieses Gefühl das Wesen der Religiosität ausmacht, sondern erst der nächste Schritt, die Reaktion darauf, die gegen dies Gefühl eine Abhilfe sucht. Wer nicht weiter geht, sich demütig mit der geringfügigen Rolle des Menschen in der großen Welt bescheidet, der ist vielmehr irreligiös im wahrsten Sinne des Wortes.

湯田訳——…無知は無知である；何かを信じる権利は、それに由来しない。物のわかった人間は他の事柄においてはそのように軽率

に振舞わないであろうし、自己の意見、自己の組する態度に対するそのように貧弱な論証に満足しないであろう；彼がこれを許容するのは、ただ最高の、そしてもっとも神聖な事柄においてだけである。実際にはそれらは、人が久しく宗教から離れているのに、人はなおそれに固執しているというふうに自己あるいは他人をだまして信じ込ませようという努力にすぎない。宗教の問題がかかわっている時には、人間は一切の可能な不誠実および知的不品行に対して罪を犯しているように見える。言葉の意味がほとんどそれらの本来の意味を何一つ保持しなくなるまで、哲学者はそれらの意味を引き延ばす。彼らは彼ら自身が創造した何かある朦朧とした抽象を神と呼び、今や彼らは全世界の前に理神論者、神を信じる人としてのポーズを取る。彼らの神は本質のない影にすぎず、もはや宗教教義の強大な人格ではないけれども、自分たちは高次の、より純粋な神の概念を認識した、と彼らはみずから誇ることも出来た。宇宙の前における人間の微小さ、および無力の感情を告白する人間を、批評家は“深く宗教的である”と宣言することに固執する。宗教の本質を構成するのはこの感情ではなく、むしろ次の一步、すなわちこの感情に対して一つの救済策を求める、それに対する反作用であるけれども。それよりも先に行かず、宇宙における人間の微々たる役割に甘んじる人は、むしろ言葉のもっとも真の意味において非宗教的である。

V

『ある幻影の未来』のハイライトは、セクションV-VIである。わたくしは、これら二つのセクションの浜井訳の検討を以て筆を擱いてもよい。翻訳の原則に関して、わたくしは必要と思われることをほとんど述べたからである。しかし、セクションVII-Xに関して、補足的に若干の箇所に関して、わたくしはささやかな検討を続けたい。

セクションVIIに関して、わたくしは一つだけ浜井訳を検討しよう。フロイトは仮想上の論敵に次のように言わせている。浜井訳によれば、フロイ

トは次のように言ったことになる——「無数の人々にとって、宗教こそは唯一の慰めであり、それらの人々は、それに縋ることによってかろうじて人生に耐えてゆけるのだ」(387 ページ) と。この訳は決して誤訳ではない。この訳は、非常に **readable** である。しかし、それは決して正確な訳ではない。わたくし自身は、今問題になっている箇所を次のように翻訳する——「無数の人間は宗教の教義のなかに彼らの唯一の慰めを見いだし、ただそれら (=宗教の教義) の助けによってのみ人生を耐えることが出来る」と。「宗教こそは唯一の慰めであり」とフロイトは言っていない。フロイトによれば、無数の人間は「宗教の教義のなかに彼らの唯一の慰めを見いだ」すのである。そして、彼らは宗教教義の助けによってのみ人生を耐えることが出来るけれども、「かろうじて」そうするとフロイトは言わない。確かに **readable** な翻訳は、出版業者を喜ばすであろう。しかしながら、翻訳においてもっとも重要なことは出版業者を喜ばせ彼らに利益をもたらすことではなく、著者の肉声を読者に伝えることである。**Readable** な訳よりも、むしろ正確な訳が必要である。

セクションⅧの最後の段落において、フロイトはコウノトリが赤ん坊を運んで来ることを話題にしている。フロイトは、子供たちに事実をありのまま教えることを拒まない方がよいと考え、次のように言っている——「かくてわれわれは、事実をこういう象徴を衣にくるんだ形で伝えることは止め、幼児には、幼児の知能程度に応じた範囲で、事実ありのままを教えてやるほうがよいのだという確信に到達している」(浜井訳, 395 ページ) と。この邦訳は、決して誤訳ではない。それは非常に分かりやすい訳である。しかし、「幼児には、幼児の知能程度に応じた範囲で、事実ありのままを教えてやるほうがよい」という訳は、果たしてフロイトの精神状態を忠実に反映していると言えるであろうか？ フロイトの意図は、もしも子供にコウノトリが赤ん坊を運んで来るのかと尋ねられれば、子供の知的な段階に適応して子供に実際の事情を知らせることを拒絶しない方がよいということである。ここの箇所を、わたくしは次のように翻訳する——「真理のそのような象徴的カムフラージュの伝達をやめること、および子供の知的段階に適応して子供に実際の事情を知らせることを拒まないことがより良い、という確信にわれわれは到達した」と。赤ん坊がどうして生まれるかと子供に尋ねられれば、われわれは事実をありのままに子供に教

えた方がよいということと、本当のことを知らせることを子供に拒まないことがより良いということの間には、心理学的に大きなギャップが存在する。『ある幻影の未来』を翻訳する際、われわれはフロイトが精神分析の創始者であり、精神分析の方法によって宗教ないし宗教教義を観察していることを忘れるべきではない。

セクションXIにおいてわたくしの注意をひいたのは、浜井女史の「他人はいざ知らず」(396 ページ) という訳である。わたくしの関知する限り、“いざ”という代わりに“いさ”を用いるのが正しい。例えば、「余人はいさ知らず」というようなものである。しかし問題は、「他人はいざ知らず」という訳が果たしてフロイトの意図に合致するか否かである。「他人はいざ知らず」という訳文に対応するドイツ語の原文は、*Das verstehe wer kann* である。この原文を正しく理解するためには、当該の箇所を検討する必要がある⁽⁶⁾。この箇所は、仮想上の論敵がフロイトに向かって話し掛ける形式を取っている。ここで、わたくしは浜井訳を挙げよう。女史は、次のように訳している。

浜井訳——「それにもう一つの矛盾は、あなたが、一方では、人間を知性によって導くことは不可能で、人間は情熱と欲動要求に支配されていることを承認しながら、他方では、人間の文化への服従の基礎になっている感情的要素を合理的要素によって置き代えることを提案していることだ。他人はいざ知らず、私には、この二つを両立させることは不可能のように思われる」(396 ページ)

浜井訳に対して、以下においてわたくしは自己自身の訳を読者に紹介しよう——

湯田訳——「もう一つの矛盾は、あなたが一方では人間は知性によって導かれ得ず、自己の情熱および衝動要求によって支配されることを承認しているのに、他方では文明に対する自己の服従の情緒的な基礎を理性的なものによって取り替えることを提案していることである。(そのように理解することの) 出来る人は誰

であろうと、(そのように) これを理解しても構わない。わたくしには、それはこれかあれかであるように思われる」。

Das verstehe wer kann という文句を「他人はいざ知らず」と訳すことが明白な間違いであるとは断定されない。しかし Das verstehe wer kann の意味を「(そのように理解することの) 出来る人は誰であろうと、(そのように) これを理解しても構わない」というふうに、わたくしは理解する。ここで使用されている verstehe は接続法現在 (3 人称・単数) であり、もしも (そのように) 理解しようとするならば、(そのように) 理解してもよいということを、verstehe という語形は意味するようにわたくしには思われる。仮想上の論敵はこのことを容認しながらも、自分は“あれかこれか”一つしか選択しないという決断をフロイトに知らせる。もちろん、仮想上の論敵との対話は、フロイト自身によって設定されたものである。

セクションIXには、わたくしの愛する次の文句が含まれている——Der Mensch kann nicht ewig Kind bleiben, er muß endlich hinaus ins „feindliche Leben“. Man darf das „die Erziehung zur Realität“ heißen… (p. 373)。この文句を、浜井女史は「人間は、誰しも永久に子供でありつづけることはできず、いつかは『敵意に満ちた実生活』の中へ出てゆかねばならない。これは『現実世界への教育』と呼ぶべきもので」(399 ページ) あると訳している。この箇所を、わたくし自身は次のように訳する——「人間は、永久に子供のままであることは出来ない。彼は、最後に“敵意のある人生”のなかへ出て行かねばならない。人は、これを“現実への教育”と呼んでもよい」と。

セクションIXの最後の段落において、フロイトは“あの世”から“この世”へ注意を向けることを提案し、次のように言っている——「彼岸への期待を捨て、そのことによって自由になった全エネルギーをこの地上での生活に集中するならば、人類はおそらく、人生がすべての人間にとって耐えられるものになり、もはや誰ひとり文化の重圧に苦しむことがないという段階に到達するだろう」(浜井訳、399 ページ) と。わたくし自身は、この文句を次のように訳する——「自己の期待を来世から逸らし、そしてすべての解放された力を現世の生活に集中することによって、人生がすべ

ての人に耐えられるようになり、そして文明がもはや誰ひとり圧迫しないという状態に、恐らく彼は到達するであろう」と。「もはや誰ひとり文化の重圧に苦しむことがない」というふうに浜井女史は訳したけれども、わたくしはこの箇所を「文明がもはや誰ひとり圧迫しない」と翻訳した。浜井女史は *Kultur* を一貫して“文化”と翻訳し、わたくしはこれを終始“文明”と訳した。浜井女史は「彼岸への期待を捨て、そのことによって自由になった全エネルギーをこの地上での生活に集中するならば」と訳している。しかしながら、*Dadurch, daß er seine Erwartungen vom Jenseits abzieht und alle freigewordenen Kräfte auf das irdische Leben konzentriert* という文章は、「自己の期待を来世から逸らし、そしてすべての解放された力を現世の生活に集中することによって」と訳されるべきである。*Dadurch* は、「(彼は) 自己の期待を…」ということ、および「そしてすべての解放された…」ということの二つによってということの意味する。いやしくも、オリジナル・テキストを他の言語に翻訳しようとする人は、文法的に正確な翻訳を読者に提供すべきである。

セクションXにおいて、フロイトは *Illusion* という言語を頻りに使用している。浜井女史は、もちろん、この語をすべて“幻想”と訳している。例えば、浜井女史はXの冒頭の文句を次のように翻訳している——「すべての幻想を断念することによってこの地上での生活に耐えられるようになった人間なぞ、夢のようにすばらしい話だ」(399 ページ)と。しかし、「人間なぞ、夢のようにすばらしい話だ」という文章は、論理的に無意味である。わたくしには、この日本語の意味は不明である。フロイトは、このような発想をしたのであろうか？ フロイトは、次のように言っている——「それは、確かにすばらしく響く。すべての幻影を放棄し、それによって地上の生活に耐えられるように適応出来るようになったある人種!」と。

セクションXにおいて、フロイトは宗教ないし宗教教義を“幻影”とみなし、科学が決して幻影でないことを強調する。彼は宗教を幼児神経症 (*Kindheitsneurose*) に類似していると考え (p. 377)。しかし、「そこからして、大人になるにつれて大多数の子供が宗教類似の幼児神経症を脱ぎ捨てるのと同じく、人類もまたこの神経症の段階をいつか克服するだろうという楽観論が生まれて来たのだ」(浜井訳, 402) という訳は、この文章が仮想上の論敵に対するフロイトの答えであることを忘れさせる。たった

今わたくしが引用した訳（浜井訳）が対話の一部であることを、われわれは想起すべきである。フロイトは、ここでは「この世に精通していることがどのようにむずかしいかということについてだまされない一心理学者」（p. 376）として発言している。しかし浜井女史はこの箇所を「…この人生をうまく生き抜くことがいかに困難であるかを十二分に認識している一心理学者」（402 ページ。下線、筆者）と訳している。とにかく、このような一心理学者としての彼は「そのように多くの子供が彼らの類似した神経症を脱却するように、人類はこの神経症の局面を克服するであろうと想定ほど楽観主義的である」（湯田訳）。宗教的な幻影にだまされないと自負するフロイトは、仮想上の論敵に向かって自己をそのような一心理学者として認めさせ、自己をのこと“彼”という3人称を用いて紹介する。“彼”すなわちフロイトは、「人類はこの神経症の局面を克服するであろう」と想定するほど楽観主義的である。フロイトは対話の形式を用いて、自己の見解を生き生きと読者に示す。そして、フロイトの文体は最高に論争的である。しかるに、浜井訳においてはフロイトの対話の精神が失われている。「…人類もまたこの神経症の段階をいつか克服するだろうという楽観論が生まれてきたのだ」という浜井訳は、わたくしの眼から見れば色あせた、生気のない訳である。

宗教的な幻影の代わりに、フロイトは人類の未来を決定するものとしてわれわれに科学 (Wissenschaft) を提示する。そして、科学において知性の優位が認められることは、言うまでもない。Der Primat des Intellekts liegt gewiß in weiter, aber wahrscheinlich doch nicht in unendlicher Ferne (p. 377) という文句は、最高に印象的である。わたくしは、この文句を次のように翻訳する——「知性の優位は、確かに遠い、遠い未来に横たわっている。だがしかし、それは恐らく無限の未来にはななかり」と。この箇所を、浜井女史は次のように訳している——「なるほど、知性の優位は遠い遠い未来にしか実現しないであろうが、しかしそれも、無限の未来のことというわけではないらしい」（402 ページ）。科学者としてのフロイトは遙かな未来に知性の優位が支配的になることを期待していた。そして彼は、宗教教義を肯定する仮想上の論敵を次のように皮肉った——「あなたは死の直後に至福を開始させようと欲し、それ（＝至福）から不可能なことを要求し、そして個人の請求を放棄することを欲しない」（湯田訳）。

死後の至福を、フロイトは幻影として却下する。人は、死後に永遠に生きたいという願望を有するかもしれない。しかし“永遠の生命”は、フロイトにとっては単なる幻影にすぎない。そのような至福について要求することは無益である。しかも死後には何一つ存在しないというのがフロイトの考えである。死後の生を肯定する人は、生前の人格が“あの世”におもむくことを承認しなければならない。死後においても、“個人の請求”(Anspruch der Einzelpersonen) は放棄されるべきではない！ フロイトの文章は明晰であり、しかも挑発的である。しかるに浜井訳においては、フロイトの論争的なエトスは少しもわれわれに伝わらない。女史は、問題の箇所を次のように翻訳している——「反対論者は、永遠の幸福がわれわれの死のあとすぐ始まることを要求し、その永遠の幸福に過大な期待をかけ、個人的な要求も断念しようとはしない」(402 ページ) と。浜井訳によれば、フロイトは「その永遠の幸福に過大な期待をかけ」と述べたことになる。しかしフロイトは、死後における永遠の至福が不可能であることを強調している。「あなたは…それ(=至福)から不可能なことを要求し」(Sie…verlangen von ihr das Unmögliche) というのが、フロイトの実際の発言である。「反対論者は…その永遠の幸福に過大な期待をかけ」という発言は、フロイトには帰せられない。

宗教ではなく科学が人類の未来を決定すべきであると信じるフロイトは、次のような考えを率直に述べている——「世界の現実について少しばかり知り、それによってわれわれがわれわれの力を増進し、それに適応してわれわれの生活を整えることは科学的な作業にとって可能である、とわれわれは信じる」(湯田訳) と。当該箇所を、「ある幻想の未来」の訳者は次のように訳している——「すなわちわれわれは、科学の進歩によっていくらかなりとも現実世界についての知識を手に入れる可能性が残されていること、それによってわれわれの力を高め、またそれに応じてわれわれの人生を設計しうることを信じているのである」(403 ページ) と。浜井女史は「…科学の進歩によって…現実世界についての知識を手に入れる可能性が残されている…」と訳したけれども、フロイトは科学の進歩に全面的な信頼を寄せ、科学の可能性を信じていた。「世界の現実について少しばかり知り…それに適応してわれわれの生活を整えることは科学的な作業にとって可能である…」ということと、「科学の進歩によって…現実世

界についての知識を手に入れる可能性が残されている……』という表現は、到底同一人物の表現とは思われない。フロイトの心の息吹きを感じさせないような訳は、果たしてフロイトの翻訳と言えるであろうか？

『ある幻影の未来』の最後の文句は、次の通りである——Nein, unsere Wissenschaft ist keine Illusion. Eine Illusion aber wäre es zu glauben, daß wir anderswoher bekommen könnten, was sie uns nicht geben kann (p. 380)。この文章は、極めてやさしい。浜井訳を、わたくしはそのまま認めてもよい。この機会に、わたくし自身の訳および浜井訳を並列しよう——

湯田訳——いや、われわれの科学は幻影ではない。しかし科学がわれわれに与えることの出来ないものを、われわれがどこか別のところから手に入れることが出来るかもしれないと信じることは、一つの幻影であろう。

浜井訳——いやいや、われわれの科学は幻想などではない。これに反し、科学が与えることができないものを何かほかのものが与えてくれるのではないかと信じるようなことがあれば、それこそは幻想と言うべきであろう。

結びに代えて

外国の思想家について学ぶ時、直接原典を読むことが理想である。しかし現実の問題として、われわれが直接読める原語の数は制限されている。原典を通じて読むことは、今日においては非常に困難になりつつある。あの偉大なヘーゲルは、確かに西洋の文学、哲学、歴史、および科学をオリジナルで読むことが出来た。しかし、その彼でさえ、ヘブライ語を知らなかった。中国語およびアラビア語、サンスクリット、およびペーリ語は、ヘーゲルの視野の外にあった。ヘーゲルにおいてさえ、そうであった。今日においては、大多数の学生は翻訳者に翻弄ほんろうされている。そして学者も、益々、翻訳に依存するようになりつつある。われわれは、現実には翻訳を通じて考え、ディスカッションせざるを得ない。しかるに奇妙なことに、

翻訳が果たして信頼に値するか否かについて反省する人はほとんどいない。現在においてもっとも切実な課題の一つは、疑いもなく“翻訳の倫理”である。しかるに人は、このことについてあまり反省しない。わたくしは、翻訳の倫理を強調したい。

宗教について論じる際、フロイトの『ある幻影の未来』は極めて重要な書物である。本書は、20世紀において宗教を論じた著書のなかでもっとも重要なものの一つである。『ある幻影の未来』は、基本的に反宗教的である。しかし本書において展開されるフロイトの宗教観は、宗教学ないし文明論の立場から見て最高に興味深い。宗教あるいは文明に関心を抱く人は、本書を通読すべきである。しかし、多くの人は原典を読む代わりに翻訳を頼りにしてフロイトの宗教観、いや、宗教批判を学ぶであろう。そして我が国において広く読まれているのは、浜川祥枝女史の訳「ある幻想の未来」であろう。彼女の訳書を通じて、多くの人はフロイトの宗教批判を学ぶに違いない⁽⁷⁾。しかし問題は、浜井女史の訳が著者の口調を忠実に伝えているか否かである。著者の中心的な意味、および彼の独特の声を、「ある幻想の未来」の訳者はわれわれに伝えようと努力したであろうか？ フロイトの場合に限られないが、翻訳者の主な義務は言語の障壁を越えて著者の声を聞かせることである。『ある幻影の未来』の著者の声は、浜井女史の翻訳によってはわれわれに聞こえない。この論文において、彼女の「ある幻想の未来」というタイトルの翻訳を始めとして、ある程度詳しく、わたくしは浜井訳を言語的に検討したつもりである。私見によれば、*Die Zukunft einer Illusion* は『ある幻影の未来』と翻訳されるべきである。

ここでもう一度、わたくしはわたくし自身の論点を整理しよう。まず第一に、すべての語は、可能な限り、同一の語によって訳されるべきである。しかし浜井訳においては、翻訳のこの原則が破られることもある。例えば、*Verbot* はある時には“禁止”，ある時には“禁令”と訳されている。しかし多くの場合、翻訳のこの原則は、浜井訳においては守られている。第二に、語のルーツにまで翻訳者は行き着く努力をすべきである。*Trieb* を浜井女史は一貫して“欲動”と翻訳している。*Trieb* は *Treiben* に由来し、“狩り立てる”ことを意味するに違いない。フロイトに関する限り、この言語を本能に近い言葉とみなし、わたくしは *Trieb* を“衝動”と翻訳した。しかし *Kultur* という語をラテン語の *colere* から派生させ、これを

“文化”と訳すことは、少なくともフロイトの場合にはあてはまらない。ここでは **Kultur** を“文明”と訳すのが適切であるように思われる。いずれにせよ、翻訳においては、**key terms** は翻訳者の序論のなかで論じられるべきである。『ある幻影の未来』の訳者の序論において、当然、**Illusion, Kultur, Trieb** などという **key terms** は必要最少限説明されるべきであった……

翻訳の原則は別として、『ある幻影の未来』におけるフロイトの原文は、浜井訳に関する限り、忠実に日本語に翻訳されていない。本書のセクション I-X を通じて、少なからぬ実例を挙げて、わたくしは浜井訳をある程度詳しく検討した。結局、浜井訳はフロイトの肉声をドイツ語という言語の障壁を越えて日本の読者に聞かせようと試みていない。「ある幻想の未来」のなかにわたくしが聞くのはフロイトの声ではなく、翻訳者の声である。浜井訳のなかにわたくしが見いだすのはフロイトのメンタリティではない……フロイトの文体は簡明で明晰、機知に富み、そして挑発的である。フロイトの文体からわたくしが受けるイメージは、彼が明晰な頭脳の持ち主であり、限りなく繊細な神経を有し、しかも破壊的=攻撃的であるということである。ドイツ語のオリジナルのどのページを開いても、わたくしはたった今わたくしがスケッチしたようなフロイトのイメージを発見する。フロイトは、ゲーテおよびニーチェと同じく、破壊的な一面を有する。しかし浜井訳には、そのようなフロイトの面影はどこにも感じられない……このことを、わたくしはこの論文において詳しく検討した。

『ある幻影の未来』に関する限り、翻訳に頼って論じることは危険である。特に浜井訳を通じてフロイトの宗教観を“研究”することは、決して生産的なアルバイトではない。浜井訳は信頼に値する訳ではない。浜井訳よりも遙るかに優れているのは、*Standard Edition* における *The Future of an Illusion* である。しかし、この英訳だけによって、われわれはフロイトの『ある幻影の未来』を完全に理解することは出来ない。*Die Zukunft einer Illusion* をその翻訳と絶えず比較しながら、われわれは著者自身の声を直接聞かねばならない。原文をチェックしない研究は、研究に値しない。しかるに多くの教授および学生、あるいは一般の人々は、あまりにも翻訳に依存しすぎる。しかし、フロイトの宗教観に関心を有するすべての人が *Die Zukunft einer Illusion* を原文で読めるとは限らない。本書の信頼に

値する翻訳が必要な所以である。しかし、たといそういう翻訳が現われたとしても、それは、結局、翻訳にすぎない。それは、原文に取って替らない。研究においては、原文をチェックすることは、どうしても避けられない作業である。

『ある幻影の未来』というタイトルは、極めて示唆的である。“ある幻影”というものは、フロイトにとって宗教のことである。宗教教義が幻影であることを、彼は確信している。このことは、彼にとって真理であった。そしてフロイトは、そのような幻影を必要としなかった。それと同時に、彼は遠い未来においてではあるけれども、知性の優位を希望した。しかし、希望と深く結び付けられているのが“幻影”である。フロイトは、科学に大きな希望を繋いでいた。あるいは、そのような希望は、幻影的な性格のものかもしれない。このように、フロイトは反省した。しかし、科学は決して幻影でない——このように彼は宣言する。宗教には未来がないけれども、人類の未来を決定するのは科学である。このように彼は考えた。これら二つのテーマが、『ある幻影の未来』というタイトルに含蓄されている。フロイトにとって、**Illusion** (=幻影) という語はキー・タームの一つである。

浜井訳の検討を通じて、わたくしは翻訳の倫理の必要性を強調したかった⁽⁹⁾。浜井訳に限らず、誤訳に接してわたくしはショックを受ける。文章全体の意味を取り違えるような誤訳の場合は、なおさらである。しかし、わたくしが大きなショックを受けるのは、むしろ致命的な誤訳に接しても多くの人々が何のショックも受けないという事実である。多く人は誤訳をそのまま受け入れ、そのことに対して特に痛みを感じない。わたくしがフロイトの『ある幻影の未来』の日本語訳の一つを取り上げ、それをある程度詳しく検討したのは、わたくし自身がこのような誤訳を決して許容しないという、わたくし意思を表明したかったからである。わたくしが浜井訳を徹底的に批判したのは、わたくしの愛する偉大なフロイトの言葉がゆがめられて読者に伝えられているからである。そのことに、わたくしの神経は耐えられない。わたくしが「フロイトの『ある幻影の未来』の一翻訳について」という論文を書いた真の動機は、決して「ある幻想の未来」の翻訳者に対する嫌悪ではない。それは、フロイトに対するわたくしの愛ゆえである——

Not that I loved Cæsar less, but that I loved Rome more.
—Shakespeare, *Julius Caesar*. Act. III., Scene II.

[注]

- (1) 本書の第Ⅶ部 (164-99 ページ) において、わたくしはフロイトの宗教観について詳論した。
- (2) 幻影の実例に関しては、『宗教とは何か』183-85 ページ参照。
- (3) *Standard Edition* において、J. Strachey は Kultur を通常 'civilization', kulturell を 'cultural' と英訳している (*The Future of an Illusion*, p. 4)。わたくし自身は原則として Kultur を“文明”, kulturell を“文明における”と訳した。
- (4) “欲動”と浜井女史が訳した理由の一つは、恐らく Trieb が感情に近接した衝動を意味するからであろう。『精神医学事典』(加藤正明・保崎秀夫・笠原嘉・宮本忠雄・小此木啓吾編。弘文堂 1975 年)によれば、Trieb は欲動と訳されている (pp. 660-61)。“欲動”の項目において、小此木氏は「Trieb (drive) は『本能』とも訳されるが、厳密には『欲動』と訳すべきであり、…」と述べている。(p. 660)。しかしフロイトに関する限り、Instinkt および Trieb は厳密に区別されるには及ばない。Trieb を、わたくしは一貫して衝動と翻訳した。
- (5) “人間化する”と訳すのは、あまりにも直訳的かもしれない。しかし, vermensschlichen というドイツ語の動詞に対応するのは、“人間化する”という訳である。常に Smooth な訳語を用いることは、決して良いことではない。
- (6) Das verstehe wer kann という文句に関して、わたくしは共立薬科大学の専任講師江原吉博氏から示唆に富んだアドバイスを受けた。
- (7) わたくし自身でさえ、湯田ゼミナールにおいて学生諸君と共に浜井女史の「ある幻想の未来」をテキストを選び、一年間彼女の翻訳を精読した。学生諸君と共に、わたくしはセクションⅠの最初の幾つかの段落を *Standard Edition* における英訳を用いて輪読し、それ以後は専ら「ある幻想の未来」を読んだ。もちろん、わたくし自身は、それ以前に数回オリジナルで *Die Zukunft einer Illusion* を通読していた。
- (8) 著者の声を読者に伝えるというのが、翻訳の倫理である。そのためには、不正確な訳は極力避けられるべきである。しかし翻訳の倫理と並んで、もう一つ別の問題がある。それは、分析的なヨーロッパの言語をどのように非論理的な日本語に翻訳すべきかということである。日本語が如何に非論理的であるかということに関して、未発表の原稿(「日本人のアイデンティティについて」)において、わたくしは幾つか実例を挙げて簡明に論じた。この問題については、近いうち発表されるはずのわたくしのこの長い論文を参照されたい。「フロイトの『ある幻影の未来』の一翻訳について」において、わたくしはただ一個の literary critic として発言したまでである。(1960. 10. 14)